

乳腺外科医(橋本)

## 梅村定司さん



手術は無事終了した。

昨年9月、同病院に隣接して、乳がん専門の医療センターを開設。県内に数人しかいない乳腺専門医の1人を招き、2人で手術をこなす。放射線技師はマンモグラフィ撮影認定診療の有

資格者。薬剤師、理学療法士、管理栄養士らもスペシャリストを集めた。患者の負担を軽減し、診療から治療後のケアまで、一貫して支えたいとの思いを形にした。

「手術は予定通り終了しました。1週間ほどで退院できますよ」。7月末、紀和病院(橋本市岸上)の控室で、家族に結果を説明する乳腺外科の医師・梅村定司さん(43)の姿があった。その柔らかな笑顔からは、数分前まで続いた乳房再建手術の様子は想像できない。「どうでしょうか」と一言、あいさつすると、梅村医師の優しいまなざしは一転、鋭くなった。手術室の空気が、ぴりっと引き締まる。感触を確かめながら、電気メスの「ジジッ」という音とともに、右乳房に切り込みを入れると、第1助手の医師が素早く止血する。梅村さんが言葉を発するのには、器具を医師に差し出す「器械出し」役の看護師に指示を出すときくらい。あとは、何も言われなくても、麻酔科医や看護師らが黙々と役割をこなしていた。1時間1分15秒で、

# 乳房再建に新手法



手術室では、張りつめた空気が漂っている(橋本市岸上の紀和病院で)

「切除了した乳房の再建に、下腹部の脂肪を利用する」。遊離真皮脂肪片移植を、独自に取り入れたのも「患者にとつて何が一番か」を考えてきた結果だ。人工物を入れると拒絶反応の心配があり、自分の体内の組織を使う再建では、一般的に後背筋や腹直筋を利用するが、必要な筋肉が欠けてしまう。下腹部の脂肪なら、これらのデメリットを克服できる。形成外科の世界では、顔や首の移植に利用されてきたものの、生着率が良くないとされてきた。梅村さんは、乳がんを補填する部位は筋量が多く、十分、生着すると判断。すでに、症例は60を超えた。救えなかった命もある。4年前に診た、小学一年の子どもを持つシングルマザーの女性が忘れられない。進行性の乳がんで、すでに

## 患者の立場優先「青洲目指す」

手術室とは表情が一転し、笑顔で患者と接する梅村さん

全身に転移していた。女性は「子どものためにもまだ死ねない」と、一言も弱音を吐かず、梅村さんも手を尽くしたが、結局亡くなった。「親としての無念さややりきれなさを考えると...」。このような人を一人でも減らしたい。早期発見すれば助けられたかもしれないと、診療や手術のかたわら、講演では乳がん検診の必要性を説いている。

紀の川市出身、華岡青洲が世界で初めて全身麻酔で乳がん手術を行った地のすぐ近くで育った。自然と青洲にあこがれ、医者を目指す。学生時代は内科志望だったが、様々な治療法があり、医者の判断や技量が結果を大きく左右する乳腺外科に、興味を持ち始めた。青洲と同じ乳がん治療の道に進むことになり、「どこか運命を感じる」と笑うが、「和歌山を乳がん治療の名所にした。おこがましいかもしれないが、第二の青洲になりたい」。そう話す表情は真剣そのものだ。(上野綾香)

紀和プレスト(乳腺センター)(橋本市岸上23の1 0736・34・1255) 受付時間午前8時~11時半、午後1時~4時(原則予約制)、セカンド・オピニオンは別途対応、相談1件につき8000円(税込み、保険外診療)

り推進課によると、2008年度の県内の乳がん検診の受診率は、40歳以上の女性で22.5%、全国平均(14.7%)を上回っているものの、死亡率が減少するとされる受診率50%には届いて

いない。自己触診で分かるのは1ヶ月前後。検診では、それ以下のがんが発見できるため、各自治体で受診率向上のための様々な取り組みが行われている。